

学構造がこの事件に示されている。「ホロコースト・エンサイクロペディア」などに依拠しながら簡単に要点を述べれば、それはつぎのようであった。

四一年九月一九日、ドイツ第六軍と第二九軍団がキエフ占領を果たした。キエフのユダヤ人約一六万人のうち一〇万人がドイツ軍による占領以前に逃亡していた。約六万人がドイツ占領下のキエフに閉じ込められた状態になった。ところがそのキエフで、四一年九月二四日から二八日にかけて市中心部の多数の建物が炎上した。建物の多くはドイツ軍管理当局や軍によって利用されていた。占領のために貴重な建物群が炎上したのである。この放火炎上・火薬倉庫爆発事件でたくさんのドイツ軍関係者とキエフ市住民が死亡した。戦後判明したところでは、その爆破はソ連治安警察が行った爆破・破壊作戦によるものだった。犯人が確実でなくても、ソ連秘密警察ないし特殊工作部隊がドイツ占領軍施設を破壊しようとするのは必然のことだった。ソ連軍が撤退に際し、敵の軍事関係施設を破壊するために残して置いた秘密工作隊が簡単につかまるはずがない。だがキエフ大火、爆破炎上の犯人を見つけ出し、鉄槌を加えなければならぬ。放火犯人も見つけ出せないようでは占領権力の信頼は失墜する。本当の犯人を探し出せないとすれば、それに替わるものを見つけ出さなければ報復の熱情は収まらない。大都市キエフ市民の不満と不安を和らげることもできない。戦火で住宅を失った市民の怒りをなだめ、仮住まいを与えなければならぬ。四一年九月二六日、ドイツ占領当局は会議を開いた。その結果、ドイツ占領軍関係施設の破壊行為にたいし、キエフ市のすべてのユダヤ人を処刑することにした。この会議に参加したのは軍行政官エバーハルト少将、南方陸軍集団後方地域担当高級親衛隊・警察指導者フリードリヒ・イエツケルン親衛隊大将、^{アインザッツグルッペン}特別出動部隊Cの隊長で親衛隊少将オットー・ラツシエ博士、⁽³⁴⁾それにその小隊(特別コマンド4a)の長、パウル・ブローベル親衛隊大佐らだった。つまり、ユダヤ人抹殺作戦は、軍と警察の協議と協力による作戦だった。キエフ市の全ユダヤ人を殺す作戦の実行は、特別コマンド4aに託された。四一年九月二八日のユダヤ人にたいする告示。二一九日午前八時にメルニク通り・デクチャレフ通り交差

点に、新しい居住地への移住のため集合せよ」と。戦時下、大量の住民が移住させられることは、すなわち強制移住自体はよくあった。連行途中、逃亡を図ったりついていけない者は警備の部隊に射殺された。連行に抗することはできない。移住行進が生きる道である。しかし、それは死への行進だった。四一年九月二十九日と三〇日、バビ・ヤール溪谷でユダヤ人三万三、七七一人が射殺、埋葬された。その中にはもちろん小さな子供もたくさんいた。その後数カ月、さらに何千人ものユダヤ人がバビ・ヤールに連行され、殺害された⁽³⁵⁾。

その背後でドイツ軍の被害は増大しつづけた。モスクワ攻撃を再開し、早い冬の到来もあってドイツ軍は最初の「冬の危機」に直面する。四一年一月一三日までの総損失は、ハルター日記一月一七日によれば、将校二万二、八一三人、下士官・兵士六七万六、九一三人、合わせて六九万九、七二六人となった。総損失（病人を除く）は、東部陸軍平均現員三四〇万人の二〇・五八%、すなわち実に二割を越えたのである⁽³⁶⁾。しかも、向かうは厳冬の大口シア。スターリン体制下の内実がどうであれ、ドイツ側前線に見えてくるのは、繰り返し撃滅し大量に捕虜を捕獲しても、なお陸続と登場する新手のソ連部隊である。この前線での脅威をひしひしと感ずるとき、後方地域、占領平定した地域、本国と前線との中間地域の治安問題解決の手段は苛烈になる。

三 バルバロッサ作戦の挫折とヒトラー指令

ユダヤ人絶滅政策をめぐる従来の議論は、ヒトラーの「絶滅命令」なるものの有無や時期についてあまりにも一面的先鋭的に問題にしすぎている。それに対して、拙著（一九九四年）はドイツ第三帝国のソ連占領政策を正面に掲げた。まずは独ソ戦ありきだった。方法的問題提起として、従来のヒトラー命令に一面的にとらわれたユダヤ人問題・ホロコーストの理解枠組みへの根本的批判を意図した⁽³⁷⁾。その方法的立場からすると、ヒトラーが四一年七月八月当時、

H O L O C A U S T

独ソ戦と ホロコースト

永岑三千輝

ホロコーストを
生みだしたのは
普通のドイツ人
なのか

ゴールドハーゲンの
論説に対し、
第三帝国文書を
詳細に検討しながら
反証する

日本経済評論社
定価（本体5900円＋税）